

桐ヶ谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 5 7 号

2 0 1 8 年 6 月 1 5 日

発行 中部学院大学 宗教委員会
中部学院大学短期大学部

〒501-3993
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

創立記念礼拝「あなたは、ひとりぼっちではない」

片桐 多恵子 (岐阜済美学院 学院長)

私達の大学の母体である岐阜済美学院は、今年創立100年を迎えています。創立者である片桐龍子先生の誕生日に因んで5月14日に創立記念礼拝を行っています。

龍子先生は教育を通して戦争の無い社会の実現のために一生を捧げた人です。先生は、戦争の無い社会を作る原動力は女性である。何故なら女は自分の体内に赤子を宿し、出産の苦しみと喜びの中で命の大切さ、神秘さを実感する。神様から与えられた命の大切さを実感している女性が、もっと賢くなれば戦争の無い世界が実現すると考えられました。その当時、女性は教育を受けるよりも労働を強要されていた時代でした。女子教育の充実のために学校を創立すると共に、学校に入学できない人たちの為に多くの本を書き、全国各地を講演してまわられました。それらの本やお話は、向上心に燃えていた人達の心に、砂地に水が浸み込むように、生きる力となって浸み込んでいきました。先生が書かれた書物の多くは東京の国立図書館の蔵書となっています。

「郷土に輝く女性」の一人として教育史に名を残しておられますが、苦勞が無かったわけではありません。むしろ苦勞と悲しみの連続でした。学校創立以来、二人三脚で歩んできた夫の龍三郎先生は病の為に先立たれ、後継者として望みを託していた一人息子も病死、ご自分も太平洋戦争直後、その信仰故に公職追放の身となります。おまけに土地の事で難題がふりかかります。高校を広い場所に移

転するために神様に祈り続け、ここぞと決めた土地の地主の家に毎日毎日座り込んで手に入れた農地が、農地改革により農地の所有者自身が耕さなければ国に没収されることになったのです。先生は自ら田んぼに肥料をやり、慣れない農作業を一人でやり続けて土地を守られました。後に、そこに孝先生

によって建てられた校舎を眺めて喜びの涙を流しておられた光景を覚えています。

一方、後継者となった孝先生も学校を守るために孤軍奮闘でした。本来後継者となるはずであった登喜夫先生から妻の孝先生への遺言は「学校を頼む。母と子どもを頼む」でした。子育てをしながら、理事長・校長として学校経営に必死な毎日でした。戦争に負けた

日本は貧しくて、子ども達を私立高校へ進学させるゆとりのある家庭は少なく、高校は存亡の危機にありました。大阪から嫁いできたので、岐阜の教育界に恩師や知人はほとんどありませんでした。自分のクリスチャンとしての信仰を拠り所として、キリスト教主義を建学の土台に据えた教育理念の再構築を決断・実行されたのです。その後も困難は続きましたが、「インマヌエル(神、共にいます)」と祈りながら、堅い信念に立って明るく生きられたのです。晩年、『桐ヶ谷通信』に次のように記されています。「生きるか死ぬかの病床にある時、『主の祈り』を捧げる気力も体力もなく、ひたすら『インマヌエル(神、共にいます)』と祈り続けた。



桐が谷通信

そうすると漸く心に平安が与えられた』と。その文章の最後に、M. パワーズの詩「足跡」を紹介

介しておられます。多くの人が、慰めと癒しを貰っている詩です。

足跡 マーガレット・パワーズ (1964年)

ある夜、私は夢を見た・・・

私は主（イエス様）と共に浜辺を歩いていた。

暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。

どの光景にも砂の上に二人の足跡が残されていた。

一つは私の足跡、もう一つは主の足跡。

しかし、砂の上に一つの足跡しかないところがあった。

それは私の人生で一番つらく悲しい時だった。

私は主に尋ねた。「私の一番つらい時に、あなたを一番必要とした時に

あなたは 私を見捨てたのですか」

主は囁かれた。「私の大切な子よ。私はあなたを愛している。

あなたを決して見捨てたりはしない。

ましてや苦しみ試練の時に、決してあなたを見捨てたりはしない。

足跡が一つだったその時、私はあなたを背負って歩いていたのだよ」

イエス様は言うておられます、「あなたは何も恐れなくてよい。私が共にいるから」



「越智キヨ先生について調べ始めて」

宗教総主事 高木 総平

皆さんは、越智キヨ先生というお名前を聞いたことがありますか。この先生のごことは『知識のはじめ 一私たちの岐阜済美学院一』19pに記されています。そこには、奈良女子高等師範学校（今の奈良女子大学）の先生として、片桐孝先生にキリスト教信仰においてよい感化を与えた方として紹介されています。

私事になりますが、昨年3月まで牧師をしていました高の原教会（奈良市）にOさんという（越智さんではありません）熱心なご一家がおられました。そのご一家とは親しくさせていただき、特に最年長のご婦人（そのご一家のお母さん）からは多くのことを教えていただきました。その方の口から、「かつて奈良女子高等師範学校の教授をしていた伯母が熱心なキリスト者で、当時学生たちと聖書を学び、まるで牧師のような働きをし、私財を投げ打って教会まで建てた」ということを繰り返し聞いていました。その方自身も伯母の方の影響でキリスト者になったということでした。また現在は使われていないその教会の礼拝堂が、そのOさんのお宅のすぐ隣にひっそりと残って

いました。そのOさんがいつも話されていた「私の伯母が」という言葉がずっと心に残っていました。

昨年4月本学に赴任してすぐ『知識のはじめ』に目を通したのですが、その時は気づきませんでした。半年くらい経った時に読み直し、19pの「越智キヨ先生」が目にとまりました。上記のOさんの旧姓を聞いたことはなかったのですが、その弟さんが越智さんだということ思い出しました。すぐOさんに電話し、「いつも言われていた伯母さんは越智キヨさんですよ」とお尋ねしたら、「そうですけど」と当然のように答えられました。不思議な驚きでした。Oさんには事情を申し上げましたら、（孝先生は）あの頃たくさん伯母のところに来ていた学生さんでしょうね、と言われ、本学院のキリスト主義の原点になる孝先生にキヨ先生は大きな影響を与えたこととなりますねと二人で話した次第です。私自身にとっても奈良の教会から本学院に呼ばれたことの不思議な導きを実感しました。

その後Oさんとお会いする機会があり、Oさんがお元気なうちにキヨ先生のことを教えていただきたいとお願いし、快諾していただきました。その結果先月Oさんを訪ね、一回目の「越智キヨ先生」についての聞き取りをしました。お話を聞き、写真やキヨ先生がシャム国（現タイ国）の皇后女学校の教師（教育顧問）をしていた時、王家からいただいた銀のナイフ、フォークなども見せていただき、お茶の水女子高等師範学校を卒業したばかり、26歳で外国の学校の教師をしたということ、その後も留学をされ、当時としては珍しく国際的な視野を持った方だったと知りました。三年後にシャム国の学校を任期満了で退職、その後母校の研究科で学んだ後、1909年から奈良高等女子師範学校に勤められました。一時期ご家庭の事情で退職されましたが、復帰され1951年まで勤められました。その間若き日に二年間アメリカ、イギリスに留学、イギリスにおいてキリスト教と出会い熱心なキリスト教徒としての歩みが始まりました。その後もヨーロッパに一年間留学されました。

キリスト教徒になり帰国され、所属する教会を探されましたが、当時の市内の教会の男性牧師には批判的で、ご自身で教会を建てることを決意されましたし、学校では生徒たちに熱心に聖書を教えられたそうです。自立的な女性だったことが分かります。その先生が一番活躍されていたころ孝先生が学生であったのです。『知識のはじめ』にはこうあります。「先生（孝先生）は奈良女高師時代時代は寮生活を続けられ、キリスト者であった家政科長の越智キヨ先生の指導を受けて、有志と共に聖書研究会を開かれました。当時、学内で聖書研究会を行うことは難しかったため、奈良育英高校の教室を借りて聖書の学びを続けたとのことです。」

この越智先生はどのような方だったのでしょうか。その存在は孝先生に大きな影響を与えました。その人柄、信仰や学問への姿勢、それが孝先生を通し、本学院の大きな原点になったものと思われまます。これから資料等は限られていますが、Oさんへの聞き取りも継続し、「越智キヨ先生」に迫ってみたいと思っています。

「二人のマーティン」

短期大学部宗教主事 志 村 真

今年2018年にそれぞれ記念の年を迎えた二人のマーティンについてお話したいと思います。

一人目はマーティン・ルーサー・キング Jr. です。キング牧師は1968年4月4日、滞在先のテネシー州メンフィスのホテルで銃撃されて亡くなりました。今年は没後50周年です。キング先生は実は、殺害されるちょうど一年前の1967年4月4日、ニューヨークのリバーサイド教会で、「Beyond Vietnam（ベトナムを越えて）」という演説を行い、ベトナム戦争に公然と反対の声を上げました。「戦争は相違を克服する正しい方法ではない。・・・ナパーム弾でベトナムの人間を焼き殺し、国中を孤児と寡婦で一杯にし、・・・暗い血みどろの戦場から肉体に障害を負わせたまま故郷に帰すのは、英知と正義と愛に矛盾している。」(M. L. キング『私には夢がある』梶原寿訳、新教出版社、2003年、178ページ)

キング牧師が暗殺された理由について、本学の宗教総主事であった梶原寿先生は、彼がアメリカ

の三つの巨悪すべてを問題にして声を上げたからだと言っておられました。三つとは「人種差別」「極度の物質主義（経済格差のこと）」そして「軍国主義」です。

2013年4月15日、一組の兄弟がボストン・マラソンのゴール付近に爆弾を仕掛け、3人を殺害、250人以上に怪我を負わせました。それから5年が経ちました。

この事件の犠牲者の一人はマーティン・リチャード君（8歳）でした。二人目のマーティンです。彼は家族と共に父親のゴールを見ようとしたのです。その後、彼の友だちがマーティンの写真を公開しました。笑顔で手作りのポスターを広げている姿です。ポスターにはこう書いてありました。「NO More hurting people. ♡Peace♡」

学校で非暴力主義について学んだ彼は、フロリダで発生した射殺事件に応じてポスターを製作したのです。彼はいかなる暴力をも止めたかった。

(次ページへ)

2018年度 宗教講演会

「ワーシップミュージックへの誘い」

同志社大学 神学部 教授 関谷 直人 先生



日 時：7月2日(月) 11:00~12:15

(第2時限の講義は行いません。)

会 場：関キャンパス 10401 教室

<招きの言葉>

讃美歌の歴史は古く、キリスト教の共同体は初代教会の時代から「歌」の形式で自分たちの信じる神様を「褒め称える」ことをし続けてきました。

その長い歴史の中で讃美歌は様々な姿を変えてきました。通常の礼拝で歌い継がれてきた「讃美歌」だけが唯一のものではありません。

奴隷としてアメリカに連れてこられたアフリカン・アメリカンの人々は自分たちの体験から「黒人霊歌」を生み出し、のちのそれはゴスペルの形となり現代にいたっています。また、現代の米国ではいわゆる“Worship Music”や“CCM (Contemporary Christian Music)”という新しい讃美歌のジャンルが確固としたキリスト教音楽の中での位置をしめるようになってきました。

今回はこうした讃美歌の中から比較的新しいものを紹介しながら、皆さんと一緒に実際に賛美をするときを持ちたいと思っています。

<講師プロフィール>

関谷 直人 (せきや・なおと) 1960年大阪に生まれる。同志社大学大学院神学研究科博士課程前期終了。San Francisco Theological Seminary において Doctor of Ministry 取得。現在、同志社大学神学部教授。実践神学担当 (説教、牧会学、パストラルカウンセリングなど)

著書に『牧会の羅針盤――メンタルヘルスの視点から』(キリスト新聞社、2015年)『現代の教会を考えるブックレット1「健康な教会」をめざして――その診断と処方――』(キリスト新聞社、2007年)『京都アカデミア叢書第3号「こころのチカラ」』(共著、コンソーシアム京都、2007年)『パッサのコーラルを歌う 名曲50選』(共著、キリスト新聞社、2007年)『ドメスティック・バイオレンス そのとき教会は』(翻訳、日本キリスト教団出版局、2005年)『クリスマス音楽ガイド CD付』(共著、キリスト新聞社、2005年)『現代キリスト教カウンセリング3巻 適応と不適応のカウンセリング』(共著、日本キリスト教団出版局、2002年)他、『信徒の友』において「ヒット曲の神学」を連載。季刊誌『ミニストーリー』にて「牧会指南」を連載。

(前ページから) リチャード君はキング牧師の非暴力の松明を引き継いで掲げたのだと思います。キング自身、かつてマハトマ・ガンジーが掲げ、そして1948年1月30日の暗殺によって一時は倒

されたかに思われた松明を引き継いで掲げたのでした。(今年はガンジー暗殺70年の年でもある。)こうした人々の平和と非暴力の松明を私たちも引き継いで掲げて歩みたい。そう願うものです。